

(様式2)

教職員研究グループ活動状況報告書

代表者の所属・職・氏名	兵庫県立長田商業高等学校	研究グループ名 日本語運用能力向上研究会	80
	主幹教諭 金川 幾久世		

研究テーマ分類番号 (6)

(1) 研究テーマ	
日本語が不十分な生徒のための日本語運用能力向上プログラム ——生徒が、あらゆる学習の基礎基本である日本語運用能力を高め、社会で自立できるようになるための支援法の探求——	
(2) 研究経過及び具体的な取組	
1 研究対象 1年生国語総合(2単位)および4年生国語表現Ⅰ(2単位)	
2 (1) 1年生の状況 1年生(男子13・女子10、計23名)に対して、入学式翌日に校内作成の「国語新入生テスト」を実施したところ、日本語運用能力が低い生徒が数名いた。日本語を母語としない生徒と日本語を母語とする生徒であった。前者は話す・聞くといった日常言語活動が不自由であり、後者は話す・聞く力はあるが、読む・書く力が不十分であった。さらに、日本語を母語としない生徒に対しては、「ひらがな・カタカナの五十音図」における日本語運用能力を調べた。「ひらがな・カタカナ五十音図」が未定着であった。具体的には、平仮名は、ま行以降、及び、拗音・促音が、片仮名は、ナ行以降、及び、拗音・促音が書けず、漢字においては、小学校配当(1006字)のうちの1年生配当漢字(80字)の読み書きができなかった。 (2) 取組 上記の結果をふまえ、この生徒達には、日本語の支援が必要であると認識し、職員の共通理解のもと、少人数グループでの指導を始めた。指導内容は、最初に、「五十音図」の読み書きを重点的に行った。次に、小学校配当漢字の読み書きを1年生から2年生へ順次、繰り返しながら徐々に積み重ねていった。さらに、「一言日記」を書き、提出を求めた。このような指導を丁寧に行ったあと、「三行作文」・「日記」などの表現指導や教科書の音読・暗誦練習を継続して行っている。 (3) 成果と課題 日本語を母語としない生徒には、母語サポーターの支援があり、電話で欠席連絡ができるようになるなど、日常生活面の言語活動は格段に進歩している。しかし、授業などの学習面では、発問や指示はわかっても、専門用語などは理解できない場合が多く、教科学習言語の修得が進んでいないことがわかった。特に、本研究の対象である高校国語の授業では、少人数指導を行っても、日本語運用能力の向上を図ることに限界・手詰まりを感じている。現在、次の打開策を模索しているところである。	
3 (1) 4年生の状況 4年生(男子6・女子5)に対しても、日本語運用能力を調べたところ、全員が母語話者でありながら、日本語表現の誤用や漢字力・語彙力の不足が目立つ生徒が、約半数存在した。 (2) 取組 上記の結果をふまえ、日本語の実践的な運用能力を高めることを目的に、小学校中学年漢字の読み書きから徐々に、高校2年生漢字が身につくよう、毎時15分程度漢字習得の時間を設け、継続的に積み上げられるようにしていった。併せて、1学期は進学や実社会で役立つ文章、特に、入社試験問題、新聞・雑誌のコラムや論説文、司馬遼太郎のエッセイ等を10編読み、文章の読み方やまとめた意見文を書く練習を重ねた。2学期は短編小説の書き方を、オリジナルプリントで紹介し、採り上げた引用作品例文7例を参考に、各自思い思いの短編小説の執筆に取り組んだ。 (3) 成果と課題 当初、漢字力・読解力・表現力が不足する生徒が半数いたが、現段階ではほとんどの者が著しく向上した。小さな目標を積み上げて達成感をもつ方法が功を奏したと言える。今までまとめた分量の自分の意見や読書感想文を書いた経験がないという生徒達でも、こつこつと継続して書く指導を行うことで、短編小説を書くことができる力がつくことがわかった。	